支倉徒然
はせくらつれづれ

～セピア色の風景～

「冬の盛岡」

青田　茂雄
仙台建設業協会専務理事

雪です。

こんな風景を見ると、昔の盛岡を思い出します。もう40年以上も前になります。

当時の盛岡は、ひと冬に零下15度の日が3、4回あり、池が全面凍りスケートリンクが三面もできる酷寒の街でした。

雪はそれほど降らないのですが、一度降ると溶けず道路は根雪を過ぎ〃根氷〃になりました。氷の轍（わだち）がしばらく続きました。

道路にいわば、氷の溝レールが長くできるのです。さすがに交通に支障をきたすので、〃砕氷車〃が来て氷を砕き、路面を平坦にしていきました。

また、氷の轍の路面にうっすらと雪が降るため、盛岡への「新参者」には普通の雪に見えることから、滑って転ぶのです。それも、おっとっと！転びの技あり転びではなく、一気にすてーん！と転ぶ、〃一本転び〃なのです。さらに、その脇を無理くり自転車で飛ばす人もいて、びっくりしてさすが「むりおかの人」だなあ～などと思ったものでした。

私も相当の数の一本負けをしました。負けるたびに、こんな冬を（順調にいって）あと三度も過ごすのかと、暗澹（あんたん）たる思いでした。しかし、次の冬には盛岡の歩き方を覚え、その冬の新参者の一本負けを懐かしく見ていました。

時間の経過とともに街にも人にも馴染み、家を、故郷を出ることの意義を知り、卒業近くには盛岡を、第二の故郷と思えるようになりました。故郷の18年に比べ、わずか4年の第二の故郷と考えると、いかに盛岡時代が密だったかとしみじみ思います。

まさに、馬には乗ってみろ、街には添うてみろ、です。

降雪に見舞われた現在の盛岡市菜園通り

●あおた・しげお　1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める